もぶおん！

壱岐 鹿目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もぶおん！

【Ｎコード】
Ｎ６０７０Ｚ

【作者名】
壱岐　鹿目

【あらすじ】
桜ヶ丘女子高等学校に入学した瀧エリとその幼なじみの佐藤アカネ。彼女達は『けいおん！』という物語の中のモブと呼ばれる存在でしかなかった。
しかし立花姫子、若王子いちご達との出会いを得て彼女達にも音楽の物語が生まれる。

けいおん！アナザーストーリーもぶおん！

みんなから見れば私達はモブかもしれないけど、確かに私達の物語は存在したんだ！

#1―入学式―（前書き）

最初はバレー部と髪型の話。
徐々に軽音部と交流を深めて、主人公瀧エリがバンドをやりたいと言い出す予定です。

それまで生暖かい目で見守ってください。

#1―入学式―

窓の外から鳥の泣き声が聞こえる。どうやら朝のようだ。
4月の前半だからまだ寒いし布団から出たくない、そう思った矢先にセットしていた目覚まし時計が7時を示した途端大きな音を鳴らした。

「寒い、眠い…無理」

そう言いながら私は布団から手を出して目覚まし時計をオフにする。すると音が鳴り止み私は再び夢の世界へ……あれ
確か今日は4月8日。私の―――

「入学式だぁぁぁ!!」

私は布団から飛び出せば着ていたパジャマを脱ぎ捨てパリパリの新品の制服を着れば下の階へ鞄を持って急いで下りる。

「あらあらエリ、どうしたの?」

「お母さん、私制服ちゃんと着れてる?変じゃない?」

階段を下りれば私は近くにいたお母さんに体を回転させて制服がち

ゃんと着れているかを確認した。

「制服はちゃんと着れてるから、髪をちゃんとしてきなさい」

「はーい」

返事をしながら洗面所の前に立つ。髪がかなりぼさぼさだった。ストレートトムースで寝癖を直せば、朝食をとろうと食卓に向かおうとしたが途中で足を止める。

「……今日から高校生だし、気分転換に髪型変えようかな」

鏡と向き合いきちんと出来た自分の髪をジッと見る。

「……ポニーテールとか？」

「エリ、入学初日から遅刻するわよー！」

「あ、はーい」

髪型のことは置いといて、とりあえず朝食をとることにした。

◇

私がこれから通う学校は徒歩5分の場所にある駅から電車に乗って15分のところにある私立桜ヶ丘女子高等学校という場所だ。

電車から下りれば、私はホームの自動販売機に小銭を入れてボタンを押す。出てきたのは――――

「エリ、またコーラ？リンで骨溶けちゃうよ？」

後ろから声がしたため振り向けば、いつもは私と同じくストレートヘアーだった幼なじみがいた。だが、今日は何故かツインテールだった。

「アカネ、もしかしてイメチェン？」

私の言葉に幼なじみ、佐藤アカネは照れながら自分の髪を触る。

「あ、うん。ほら、高校生になるんだから変わろうかなって……」

「く、先を越されてしまった……」

言いながら私はコーラのペットボトルを鞄になおしてホームを出る。

「エリも考えてたの？」

「うん。最初はポニーテールにしようかと考えたんだけど、普通過ぎてつまんないと思って」

「ふ、普通……」

学校に向かって歩いていればアカネは私の言葉に少し暗い表情を見せた。あれ、私何か言ったっけ。

校門を通ろうとすれば、反対側から何かが高速でこちらに向かってくるのが見えた。

「はぁ、はぁ……あれ間違えた？」

見るからに鈍臭そうな女の子はため息つきながら校内へ入って行く。

「あの子、鈍臭そうだね」

「エリが言うか、エリが」

そんなこんなで私達も校内に入っていく。下駄箱で学校規定のスリッパに履きかえれば、すぐ近くにあったクラス表に目を通す。

「た、た、た……あった！３組だよ、アカネは？」

「エリ3組？ふぅ、これで10年目か…」

そう、何を隠そうと私とアカネは小学校の頃からの幼なじみなのだが1年から今までずっと同じクラスなのだ。

「よし、この調子であと2年アカネと一緒になれば完璧！」

そんなことを言いながら私はアカネと1年3組の教室に入っていく。

◇

「それじゃ早速だけど、クラス委員長決めるよ。誰か立候補しないか？」

入学式を終えた次の日。出席番号順のためかアカネとは席が離れてしまったため話す相手がおらず私は欠伸をしながら顔を俯せていた。ちなみに私の席は左から3列目の前から2番目。アカネは隣の列の後ろの方だったりする。なんでさ行がアカネ合わせて3人しかいないんだろ。

それよりなんかクラス委員長決めてるっぽい。

「はい」

誰かが挙手した。眼鏡の子が委員長に立候補したらしい。ああいう子は頭良いんだろうなとか思っているうちに昼になる。この学校は入学2日目から色々決めたりするので、昼食はこの日からあるのだ。私は鞄からお母さんの手作り弁当とコーラを出せば椅子と一緒にアカネの机まで持っていく。

「アカネ、一緒に食べよ？」

「良いけど、エリまたコーラ？本格的に骨が心配ね……」

そんな話を交えながら昼休みの一時を過ごした。
そして授業が終わり放課後になる。

「アカネ、帰ろ？」

「良いけど……エリは部活入らないの？」

「入りたいけど、私やりたいことといっぱいあるから考え中」

ちなみに髪型も考え中。本当に困ったものだ。この学校は私立なだけあった様々な部活や同好会があるため迷ってしまう。

「まあそのうち決める予定かな」

「そんな感じで中学の頃は大仏研究会に入ったけど、大丈夫なの？」

「大丈夫、おかげで大仏大好きになったから！」

「いや、そういう意味ではなく……」

私のガッツポーズに対してアカネは額に手をつきながらため息をついた。

下駄箱を出るとテニス部がラケットの素振りの練習をしていた。

「テニス、か」

『てあっ、まだまだだね』

脳内で強力なサーブを打って決まっている私が再生される。だが、何か現実味がなかった。

それから2週間が過ぎた。私は入部届けを机の上に置きながら私は唸っていた。未だに入部する部活を決めれていない。

「どうしよ」

「諦めて帰宅部とかは？」

私の前の席に座りながらアカネはそう呟いた。

「高校生だからちゃんとした部活やりたいじゃん！でも、今日はもう遅いから帰ろっか…？」

この問答も実は１４回目だったりする。玄関から出ると今日はバレー部が練習をしていた。

「青春だねー」

「そ、そうだね…」

アカネは苦笑しながら私の後ろをついてくる。すると唐突に横から声がした。

「あ、危ない！」

声の方向から中サイズのボールが勢いよく飛んできた。私は反射的に鞄を投げ捨て、そのボールをレシーブの要領で打ち上げた。

「……あれ？」

「嘘、今の打ち返した…？」

バレー部のメンバーは驚きながらボールを拾って私の方を見る。後ろにいたアカネも手を口元に隠すよう持ってきて驚いていた。

「エリ、バレーやってたっけ？」

「いや、皆無ですが」

それを聞いたバレーが私達の方向けて走ってきた。

「ねえ貴女、もしよかったらバレー部に入らない？初心者みたいだけど、筋は良いみたいだし」

えっと、これって確か———

「アカネ、私スカウトされてるよ！私ってそんなすごいの？」

「さ、さぁ……」

◇

「アカネ、バレーやるよ！バレー！」

完全にやる気モードになった私は放課後学校の体育倉庫から拝借してきたバレーボールを両手で持ちながら幼なじみの元へ向かった。

「結局バレー、ね。それよりエリ、その髪型どうしたの？」

「心機一転！」

ストレートヘアーだった私の髪型は、バレー部にスカウトされた次の日から変わった。いや、私自身が変わろうとしていた。髪を小さく横に結ぶ形のサイドテールに。

「と、いうわけで入部届け出しに行くよ相棒！」

「ちょ、エリ待ってよ！」

アカネは急いで鞄に荷物を入れれば体育館へ走る私を追いかけた。

みんなから見れば私達はモブかもしれないけど、確かに私達の物語は存在したんだ。

#2―試験―（前書き）

一応紹介だけでも。
基本的にモブキャラは検索したら出てくるので、興味があったら調べてください。

1話に登場した鈍臭そうな子は本編の主人公、委員長に立候補した眼鏡の子はその幼なじみということになってます。

今回も本編と並行した話です。
矛盾点として平沢唯が「クラスで一人、追試だそうです」という台詞が存在しますが、生暖かい目でスルーしてください。

#2―試験―

5月23日。私、瀧エリがこの学校、桜ヶ丘女子高等学校に入学してからもう2ヶ月が経とうとしていた。私はバレー部に入部し、それなりに学校生活を満喫していた。

「アカネー、部活行こー」

「……」

こやつは私の幼なじみである佐藤アカネ。でも何故か馬鹿を見るような目で私を見てくる。

「エリ、勉強しなくて良いの？」

「んな毎日毎日勉強しなくても別に大丈夫でしょ？」

「いや、明日からテストだし……」

……テストと言いましたねこの人。

私はすぐさま鞄に入っていた手帳を確認する。そこには24日から

27日までが中間テストと書かれていた。

「……」

「……」

「アカネさん助けてください」

「嫌です」

◇

親友に裏切られた私は家に帰宅するなり机に向かって勉強を始めた。

「いつまでもアカネに頼ってたらダメダメ私も自立しないと！」

と言いながら机の上に置いてあった漫画に目がいく。

「……くすくす」

漫画に読み耽る。

そして机で寝る。

朝を迎える。

◇

テストが終わり土日を挟んだ月曜日に、テストは返ってきた。

「次、瀧」

「は、はい……」

今返ってきているのは数学なのだが、もう残念過ぎる点数で見たくありません。

「うぅ、アカネぇ……」

「うわ、完全に赤点ね…」

１９点。

そんな点数どうやったら取れるとか聞かれることがあるけど、実際取ったんだから仕方ないだろ。

さて、アカネの点数は――――

「９６点……？」

「あ、うん」

「電卓になってしまえ！」

そんなことを言いながら私は問題用紙をアカネに投げつけた。

「ああ、今回４０点未満だった奴は追試があるから覚悟しておけ」

「んな！？」

「なんですと！？」

数学の先生こと、担任の先生の言葉に私は親指、人差し指、小指を立てた状態で驚くという謎のポーズをとってしまう。

というか校門にいた鈍臭い女子って同じクラスだったんだ。驚く彼女を見て純粋にそう思った。

◇

「アカネさん、追試の人は部活に行けません！」

「じゃあ勉強しなさい」

「わかりません」

アカネはいつも以上に呆れた表情になりながらため息をつく。

「ったく、じゃあ図書室に行くわよ。あそこならエリもちゃんと勉強出来るし」

私の家やアカネの家だと集中して勉強出来ないような口ぶりだね。まあ漫画とか読んだりするから実際そうなんだけど。図書室は私達の教室から歩いて2分程度の場所にある。中に入れば私立なだけあってなかなか広かった。学校案内の時に一度入っただけなので、ちゃんと図書室を見るのは初めてになる。

「じゃあまず数学から……ちょっと待ってね？」

アカネは鞄を置けば近くの本棚から一冊の本を取ってすぐ側にいた女の子に渡した。

「あの、ありがとう」

「ううん、1年生同士助け合わないとね？」

「アカネー、その子誰？」

私も鞄を置けばアカネを追いかけるように本棚の近くへ行く。そこにいたのは私やアカネより遥かに小さい（１５０ｃｍいってるかいってないくらいの）鬼太郎みたいな髪型の女の子が本を持っていた。

「えっと、知らない子だけど…」

「あの、木下しずかです。よろしく」

鬼太郎ちゃんこと木下しずかさんは丁寧に頭を下げた。

「私瀧エリ、３組ね」

「同じく３組の佐藤アカネ。よろしく」

私達の自己紹介に木下さんは笑顔を見せながら返事をして頷いた。

「じゃあアカネ先生、よろしく」

「はいはい」

「あの…」

椅子に座ろうとした時、木下さんはポツリと呟いた。

「なんで勉強……？」

「この馬鹿が赤点とって追試になっちゃてね……」

「んな、馬鹿言うな馬鹿！」

「追試…ですか。私でよかったらお手伝いしますよ？」

木下さんは首を傾げてそう言った。

「ほ、本当？じゃあ是非お願いします！あ、私のことはエリで良いからね。私もしずかって呼ぶから！」

私は立ち上がればしずかの手をギュッと握りしめた。アカネにずっと教わってたら頭痛くなりそうだし、友達増えるし一石二鳥だな。よし、これで追試も合格すれば完璧。

「私だけじゃちょっと無理があるから助かるわ。私もアカネで良いからね…？」

「あ、うんわかった。じゃあエリ、早速やろっか？」

「手抜かないからね」

あれ、交代で教えてくれるんじゃなかったの。まさかの同時に教えてくれるパターンですか。私の頭パンクするって。

◇

次の日、追試だった。この学校の追試はその場で採点する仕組みになっているので、当日に合格か分かる。私は答案を持ってアカネとしずかの待つ図書室へ向かった。

「アカネ、しずか……君達のおかげで合格しました」

「ふぅ、一先ず安心ね」

「エリ、本当によかったよ…」

ホントウニヨカッタ。
ウン、ホントウニヨカッタ。

「ただ私の頭がパンクするまで教える必要はありま、せん……」

私はそう言いながら図書室の床に倒れた。そして一度目の人生を終えた（嘘）。

#3―喧嘩―（前書き）

まだ音楽と関わりません。
今回は音楽の話に入る前の大事なお話です。

2年になったらキャラ紹介しようかな。

#3―喧嘩―

数日前から夏休みに入っており、私瀧エリはそれなりに高校生活をエンジョイしていた。今年からバレーを始め、バレー部に入部したので今日はバレー部の合宿に山に来ております。合宿は４日間で、３日間はびっちり練習して最終日は帰るだけという実に無茶苦茶なものである。ただ私立というだけあって、部屋は二人一部屋というちょっと嬉しいこともあった。もちろん相部屋は幼なじみ兼親友の佐藤アカネだ。

本日は３日目の夜だった。
練習が終わり、各々部屋に戻ってシャワー浴びるなり休むなりするという時間でもある。

「ふぅ、さっぱりした」

シャワーを浴び終えた私はシャワールームから出るなりベッドに寝転ぶ。

「アカネー、明日やっと帰れるよ。家の枕が恋しいよ……」

一人で呟いて初めて気付いた。アカネがいない。

「……あれ？」

シャワーを浴びる前は部屋にいたはずのアカネがどこにもいなかった。トイレの可能性も考えたが、トイレはシャワールームにある。それならばったり会っていなければおかしい。

「恥ずかしがって外のトイレに行ったかな？」

そう思ってベッドから下りようとした時、部屋の扉が開いた。アカネだった。ジュースを買いに行っていたわけでもなさそうだ。

「何してたの？」

「あの、先生に新人大会のレギュラーにならないかって言われて…」

「……え？」

新人大会って、あの新人大会。

そういうのって中学の頃からやってた経験者が選ばれるものじゃないの。アカネは私と同じで大仏研究会に入ってたし。

「その、きっと何かの間違いだよ」

違う。

「私なんかがレギュラーになれたら、エリだってすぐになれるよ――」

「違う！」

「……え？」

「アカネはいつもそうじゃん。私がいつも一緒にやろうって言ったやつはみんなアカネが先に上に行く。小学生の時のソフトボールだって、中学の時の選択のバドミントンだって……このバレーだって！」

「エ……リ？」

「それでいつも私にだって出来る？そういう見下し方が一番ムカつくってなんで気付かないの？」

「私、見下してなんて…」

「自覚なくてもそう聞こえるの！」

違う、そんなことが言いたいんじゃない。

「もう良いよ、アカネと一緒にいたら私が馬鹿みたい。絶交だからね！」

そう叫べば私はそのまま布団に潜り込んでしまった。

違う、違うんだよ。私はアカネにそんなことを言いたいんじゃないのに。

アカネはそのままシャワールームに入っていった。少し時間を置いてから、シャワールームから泣き声が聞こえた。

高校生活、最悪の夜になった。

◇

その後アカネとは一言も会話することなく帰宅した。これはその日の夜の出来事だ。

「……へくしっ」

昨日シャワー浴びてからちゃんと服着ないで寝たせいか、朝から鼻水がすごい。帰宅してからはくしゃみが出て、寒気もする。完全に風邪をひいたかもしれない。

「もう最悪…」

アカネとは絶交しちゃったし、風邪はひくしもう最悪以外の言葉が見つからなかった。

「私、アカネにいつも嫉妬して……馬鹿みたい」

いつもアカネが先に上に行くのには理由がある。私が誘うのは良いが、私はあまり努力をしようとしない。それに比べてアカネは毎日努力を怠らない。それが原因でアカネと差がついてしまう。つまり、徹頭徹尾私が悪いというわけだ。

「だからって今更謝れないしなー」

自室のベッドの上で転がっていれば携帯が不意に鳴る。表示には“木下しずか”と書かれている。

「……もしもし？」

『あ、エリ？今大丈夫…かな？』

「大丈夫だよ。で、何？」

『その、アカネのことなんだけどね…』

ああ、アカネはしずかに相談して仲介してもらったのか。アカネは私と仲直りしたいと思っているのだろう。私も正直、謝りたい。でも自業自得なのにあんなこと言って、アカネが許してくれるかがとても不安でもある。

『新人大会終わったら部活辞めるって』

「……へ？」

部活を辞めるって、なんで。
もしかして私があんなこと言ったから。
『だから仲直りしてほしいって…』
「…馬鹿。これじゃどっちが馬鹿かわかんないって」
『…エリ？』
私は大きく深呼吸をすれば一度携帯を置いて自分の頬を数度叩く。
そして再び携帯を手にした。

「しずか、わざわざありがとうね？あとは私が自分でなんとかするから、本当にありがとう！今度なんか奢るよ」
そう言って電話を切れば、タンスから服を出して着替える。
「お母さん、ちょっとアカネの家行ってくる。すぐ帰るからね！」
私は急いで靴を履いて家を後にした。私とアカネの家はとても近く、3軒隣の家の前なのだ。私は急いでインターホンを鳴らす。
『あ、エリちゃん？今アカネ出掛けててね…』
インターホンのカメラで私と判断したアカネのお母さんはそう言った。
「どこに行くとか言ってました？」

『いや……ただちょっと暗い顔してたね』

「ありがとうございます！」

私はそれを聞くなりある場所へと一直線に向かった。いつもアカネは私の喧嘩した時ある場所で泣いている。そこはこの街で一番星を見渡せる場所なので星ヶ丘広場と呼ばれている。数年前にアカネに聞いたことがある。

『ねぇ、アカネちゃんはなんでいつも喧嘩したらここに来るの？』

『だってここなら流れ星がすぐ見えるもん。だからエリちゃんと仲直り出来ますようにって願おうと思って』

初めて喧嘩した幼稚園の時、私がおもちゃを壊して喧嘩した時、アカネが私の大仏模型を落として壊した時、変わらずアカネはあそこで涙を流しながら星を眺めていた。

「アカネ！」

「……エ、リ？」

アカネは私の声を聞いて振り返る。その瞳には大粒の涙が溜まっていた。私は乱れた呼吸を調えながら、アカネに近付いた。

「合宿の時は本当にごめんなさい！」

「……ふぇ？」

「だから、嫉妬みたいな醜い気持ちでアカネにあんな酷いこと言ったのごめんなさい！アカネが人一倍努力してるのを誰よりも理解しながら、レギュラー決まったことを祝ってやれなくて本当にごめん。この世界で一番アカネのこと分かってたつもりなのに、こんな……」

「……じゃあエリ、一つだけお願い聞いて。そしたら許してあげる」

私が頭を上げればアカネが隣に座るよう促す。

「胸、貸して」

それも喧嘩した時にいつもアカネが頼むことだった。私と喧嘩したことが辛くて、悲しい。だけど人の胸で泣ける相手なんて私しかいない。だからアカネはいつも仲直りした後、私の胸で泣く。幼なじみの泣き声が街に響く。

「アカネ、ごめん」

「良いのぉ、もう良いから…」

アカネと仲直りした日にはいつも、茜色の夕焼けが輝いていた。

＃４―軽音部―（前書き）

話短めですが、ようやく音楽と関わります。

本当に短いです

#4―軽音部―

今日は桜ヶ丘女子高等学校の文化祭。私達1年3組の出し物は教室内の食品バザー。私とアカネが担当するのは焼きそば。

「へいらっしゃい。アカネ、焼きそば一丁大盛りで！」

「了解了解。平沢さん、大盛り一つ」

「了解です」

鈍臭いが代名詞の平沢唯さんが焼きそばを作り、アカネが盛り付けをして私が販売をする。平沢さんは部活が原因で喉を枯らしているらしく、ハスキーボイスだ。

「あの」

「あいよー？」

「ここに平沢さんいませんか？」

受付に現れたのは長い黒髪にお姫様カットのかわいい女の子だ。

「平沢…さん？」

「あ、澪ちゃーん」

振り返れば平沢さんはアカネに焼きそばを任せて受付に顔を出した。

「本番あるし、練習しとかないか？」

「ごめんね、私当番だから…」

それを聞いた美少女はとぼとぼと教室を出て行った。

「…平沢さん何かあるの？」

「軽音部のライブをやるのです」

アカネと交代して焼きそばのキャベツや人参を炒めながら平沢さんはそう言った。

軽音部のライブ、か。マネージャーか何かかな。そんなことを思っていれば気がつけば昼になっていた。途中で委員長の真鍋さんに言われて平沢さんは退室。昼まで私達だけだったが、昼になり私達も交代でようやく解放された。

「ふぅ、疲れた」

「エリは立ってただけじゃない」

アカネはくすくすと笑いながら私の隣を歩く。私はスカートのポケットから文化祭のパンフレットを取り出す。

「今の時間帯からだとみんな休憩だね、勇姿演技しかやってないよ」

「あれ、勇姿演技の中に軽音部ある」

「平沢さんが出るやつだね」

「よし、講堂に急げアカネー！」

私はアカネを置いてそのまま講堂へ走りだす。もちろん途中で先生に怒られて歩く嵌めになったとかはないんだからね。

◇

「間に合った…」

講堂の扉を開けるとすでに明かりが消されており、楽器を構えた４人がスポットライトに照らしだされていた。

「あれ、ギターの子って平沢さんじゃない？」

前の方の席に座るとアカネが指差す先にはあの平沢唯がいた。平沢さんは私達に気がついたのか、小さく手を振った。

「ワンツースリーフォーワンツー！」

ドラマーが始める合図にスティックを叩けば演奏が始まった。何故かわからないけれどギター、ベース、ドラム、キーボードの音を聞

いていると体が自然にリズムを取る。
歌詞こそはファンタジックで、正直恥ずかしいけれど舞台に立つ４人は本当に楽しそうに演奏し、朝尋ねてきた黒髪の女の子は歌っていた。この胸から沸き上がる気持ちは言葉で表現出来ないくらい、すごい気持ちだった。演奏は２分程で終わった。短い演奏だけど、彼女達は私に何かを与えてくれた。

「エリ、すごい演奏だったね！」

「……アカネ」

私は無意識に呟いた。

「私、バンドやるよ」

◇

家への帰路、私は空をボーっと眺めていた。バンドやるよ、か。あ

の演奏に感動して、私もバンドやりたくなっちゃったんだ。でも、さすがにアカネをここまで巻き込むつもりはない。私はそう誓いながらアカネと別れた後、全小遣いを持って楽器屋へ向かった。

「うわー、色んなギターとか置いてあるんだな」

その店には腐る程のギターが置いてあった。しかも色々な形があるため、どれを選べば良いか全くわからない。

「ともかくお金ないから安いの選ぼ」

「ギターは安いのより、しっかりした高いの選んだ方が良いみたいだよ」

唐突に背後から声がしたため振り返れば、私の親友こと佐藤アカネがいた。制服に鞄を持っているため、どうやらあのまま私を追いかけてきたみたいだ。

「エリの考えてることなんて丸分かりなんだから」

「……でもなんでアカネがここに？」

「あのね、私いつもエリに引っ張られてた。でも、私は私の意思で私もバンドやりたいって純粋に思ったの」

アカネの顔つきはいつもに増して真剣だった。多分本気なんだろう。

「じゃあ私もいつもと違うことするよ」

私。

いつも佐藤アカネと一緒に何かをやって先を越されていた私。

「私、アカネと並ぶ。アカネと並んですごいギターリストになるよ！」

そう言いながら私は5万ちょっとの白いギターを適当に選ぶ。

「よし、お前が私の相棒だ」

「エリがギターなら私はベース」

そう言ってアカネはベースコーナーにあった青いベースを持ってくる。

「よし、会計済ませて早速練習だ！」

「おー！」

私達に音楽を出会わせてくれて、そしてアカネと肩を並べて何かを出来る。軽音部は私達の天使のように感じられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6070z/

もぶおん！

2011年12月21日00時54分発行